

地方都市「消滅」を乗り越えるCLSアプローチ
— G県Y市におけるフィールドワークに基づく実践理論の構築 —

| | |
|--------------------|---------------|
| 岐阜大学看護学部 | 小木曾 加奈子(6904) |
| ○中部学院大学人間福祉学部 | 宮嶋 淳(4662) |
| 中部学院大学人間福祉学部 | 大藪 元康(2534) |
| 中部学院大学短期大学部 | 大井 智香子(3957) |
| ユマニテク医療福祉大学校介護福祉学科 | 田村 禎章(7419) |

CLSアプローチ、フィールドワーク、生命科学

I. はじめに

地元（地縁・血縁・好縁の3次元的システムで捉えるコミュニティ）は、隣人との関係の中で、一人ひとりが自分らしい生き方を実現していく場であり、歳をとっても、障害があっても、子育て中であっても、仕事に追われていても、コミュニティで自分らしい生き方（幸せの追及）を全うできることが、その人の尊厳（自己実現と幸福）を支えることになる。その意味で、今後の我が国における福祉（幸福）のあり方をシステムチックに創造していく際、公的な福祉サービスや住民の福祉力の充実・整備を図ることが求められている。コミュニティにおける身近な生活課題に対応する、新しいコミュニティでの支え合いを進めるための地域福祉の創造のあり方を検討することが緊要な課題であろう。そこで、新しい地域福祉の意義や役割、それを推進するために求められる条件とは何か、についての考え方をG県Y市のフィールドワークにより整理し、住民と行政の協働と協創による福祉のあり方を研究した。

II. 研究の視点と方法

本研究は、地方都市、あるいは農山村地域のソーシャルキャピタルの創造に資する実践を調査し、地方都市「消滅」への対応として普遍化可能な実践を探索することをめざした。

そのため、地方都市「消滅」への対応の視点として、縦糸としての「コミュニティの主體的な協働と協創」と横糸としての「対象コミュニティ別の暮らしのサポート実践」に着目した。

具体的な研究方法として、社会福祉学の知見のみならず、歴史学・社会政策学・社会心理学・幸福学・医療の知見を活用し、フィールドワークと学際的なディスカッションにより、独自の試論を構築した。

III. 倫理的配慮

本研究は、中部学院大学・中部学院大学短期大学部倫理委員会の審査を経て行ったものである。

IV. 調査の結果

どのような地域にも「エンパワメント（地力）とヘルスプロモーション(自力)とコミュニケーション(対話)」が重要な役割と機能を果たし、それらを測定する「ものさし(指標)」が必要である。そして当該地域の「歴史と文化」は生き残りに関するモチベーションに働

きかけ、「今ここ」の「共生き」に関わる姿に、「楽しい・活気・共生き・役割」などの観点からの相互作用が及ぼされるとき、コミュニティは生命体として輝きだす。すなわち、生命体の一員である一人ひとりが「コミュニティを生命体」と認識することにより、「生き残り（＝消滅を免れる）」が認識され、構造化されると考えられる。

V. 考 察

一連の調査研究から我々の導いた新理論は、以下の図のとおりである。その特徴は、第1にソーシャルワークというエコロジカル・アプローチにヒントを得て、その視点を「人」から「コミュニティ」理解へと拡大した。第2に社会福祉・ソーシャルワーク研究者の視点に加え、医療・看護・生命科学の研究者の視点を取り入れた理論である。第3に「無機物」ではなく「有機物（生命）」、とくに女性性特有の創生のメカニズムを用いて解釈を加える、学際的な解釈科学として構築した。

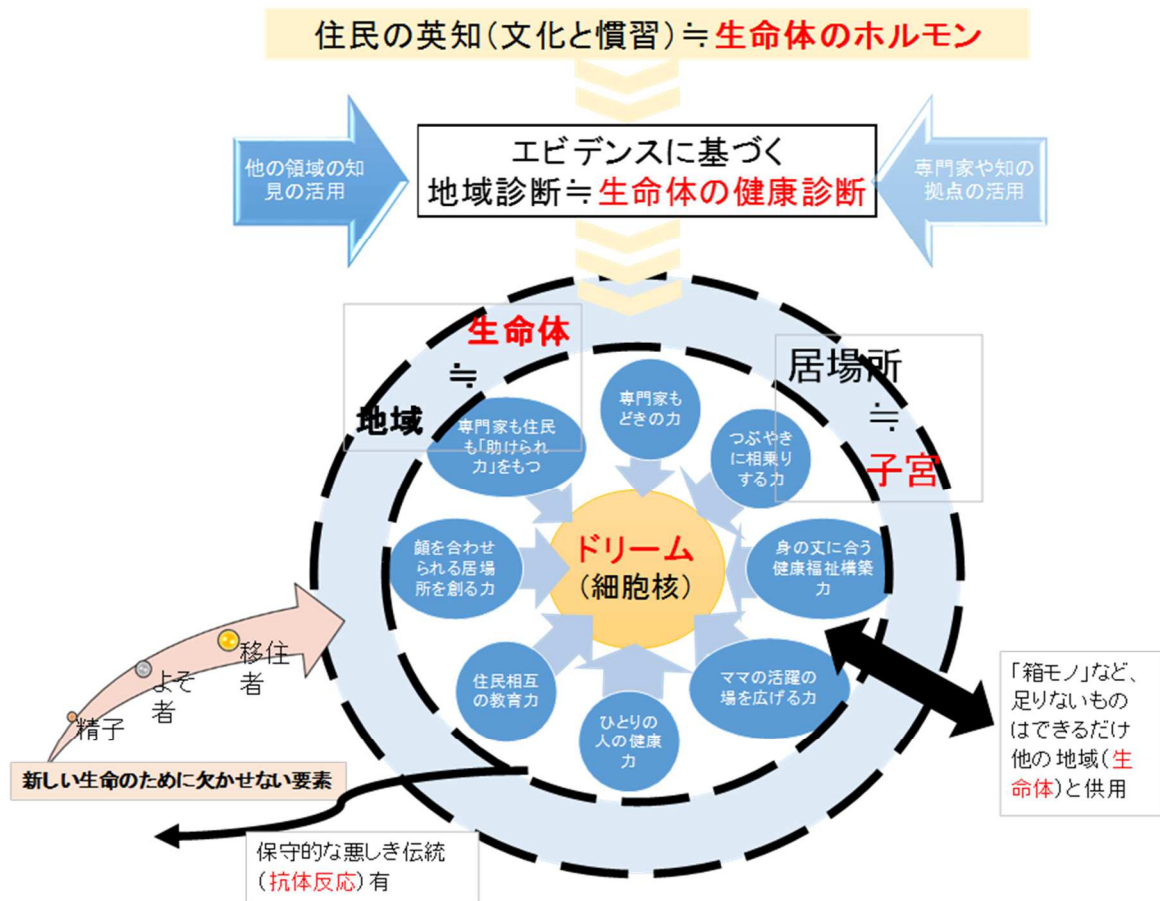


図 地域生命学的アプローチの構造

我々の「CLS（地域生命学的）アプローチ」は、コミュニティにおける様々な活動に対するフィールド調査の結果をエビデンスとしている。そして我々は、学際的なシンポジウムを開催し、学術と社会政策の観点からの示唆を得た。発表当日は、我々が描いたCLSアプローチについて、コミュニティ・ソーシャルワークとの関連で、どのような位置づけが理論的に可能なのかを詳報する。